

---

# FAIRYTAIL ~ Original Story ~

月の歌姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FAIRYTAIL 〈Original Story〉

### 【コード】

N7684Y

### 【作者名】

月の歌姫

### 【あらすじ】

FAIRYTAILのお話ですっ！！

ぜひ、読んで下さいね

## ジャンとの出会い（前書き）

つまらないかもしれませんがどうぞ見てください。

## ジャンとの出会い

時は夕方、ある森の手前に馬車が止まっていた。

「お嬢ちゃん、起きてくれるかい？」

そう言つて馬車の主人は、トートバッグを枕にして眠っているお客の体を揺さぶつて起こそうとするが…その客は起きそうにない。

その客は純白のワンピースの上に薄い水色の外套を羽織り、腰にはいくつものポーチが付いたベルトを巻き、首からは紫色の宝石が輝くペンダントと五芒星の水晶が付いた鍵をかけ、肩にかかる程度のアッシュブロンド灰金の髪を持つ十歳の少女だ。

とはいえ、十歳には思えないほど大人びているため、よく十二・三歳くらいに間違えられることが多い。

（シーオン。おーきーなーよー）

それを見ていた赤い鬘たてがみを持つ幼竜が少女 シオン・クラウディオに伝えると、やっとシオンは体を起こした。

「うゝ…もう着いたんですか…？」

シオンは眠そうに目を擦りながら主人に聞く。

「んゝ…着いたってワケじゃないんだけど…ここからは歩きでいてほしいんだ…」

申し訳なさそうに主人が言った途端、少女の目つきが変わった。そして、馬車から降りてバッグをかけると、尋ねる。

「なにかあつたんですか？」

「うん…この先に人狼の盗賊がいてね…この辺りの村は、ほぼやられてるんだ。本来なら…お嬢ちゃんの目的地まで送り届けてやりた  
いが…」

「その件で…泊まるはずの宿まで襲われた…ということですか？」

「ああ…。すまないなあ、お嬢ちゃん…」

馬車の主人は申し訳なさそうに頭を下げる。  
それをみたシオンが慌てて言う。

「別に構いませんよ！それに…無理言つて乗せてもらったのは私の  
ほうですし…」

シオンがそう言うと、主人は頭をあげた。

「そうだったね…。私は戻らなきゃいけないが…」

「あ、大丈夫ですよ？私、それなりに強いので…」

(アレ…それなりってレベルじゃないよね？)

主人が心配そうにシオンを見ると、シオンは笑顔でそう答え、いつの間にかシオンの腕のなかにいたフリーはツッコんだ。

「なら…いいんだが…。それじゃあ…気をつけてね」

そう言って主人は、シオンに旅行鞆を手渡すと…元来た道に戻って行った。

\*\*\*

「…行った…よね？」

「行った…ね」

馬車が去った後、シオンはフリーに尋ね、フリーはそれに答えた。

「…じゃ、ケロちゃんもう出てきてもいいよ」

そうシオンが言った途端、シオンの腰に付いているポーチから羽根の生えたオレンジ色のヌイグルミが出てきて言った。

「ぶはあ！…！シンドかった…」

「ケルベロス、お疲れ…」

と…出てきたオレンジ色のヌイグルミ　ケルベロスに声をかけるフリー。

「…たたく…旅立ってから1週間経つていうのに…まだ着かんのか？」

「仕方ないでしょ？ケロちゃんが経費節約しながら行くことしてるんだから…それに…」

その瞬間、辺りの温度が下がったように感じた。みると、何やら黒いオーラを出しながら、爽やかな笑顔でシオンは続ける。

「元々の原因は何か…分かってるよね？」

「…スイマセン…！！！！（汗）」

2人（？）の謝罪の音が響き渡った。

その3時間後…、辺りは闇に包まれ始めた。

「すっかり暗くなっちゃたね…」

「これだと…もうすぐ夜になっちゃうね…」

「どっか、泊まれるところあるかなあ？」

「…うん…」

フリーとケルベロスのが相談していると、

「…野宿になる…の…カナ…？」

と、遠い目でシオンが言う。

（…不味い…！！）

こういう時のシオンは暴走する。  
それを理解すると、2人(?)はすぐ行動を起こした。

「うんゴメン、シオン。お願いだから戻カムバックしてってきて!!!」〔泣〕

「だ、大丈夫やて!絶対に泊まるところ見つかるて!!!」〔汗〕

「…わかってまーす…」

（(ぜ、絶対わかってない!!!)）

2人(?)が諦めかけたその時、



「キミ、どうかしたんスか？」

その声の主は、2人(?)にとっては救いの神だった。

\*\*\*

声をかけてきたのは、跳ねた黒髪に黒目を持つ少年 ジャン。  
彼はこの辺りで母親と共に農作物を育て、それを食べたり・売ったりで暮らしているらしい。

シオン達はジャンとそんな会話をしながら、彼の家に向かっていった。

「へえ〜マグノリアへ行こうとしてたんスか…」

「はい…でも…「いいんスよ」…え？」

シオンが答える前にジャンは遮ると、続けた。

「わかってるんス…あいつらのことは………」

ジャンはそう言って俯いたが、すぐ咳払いをし、伸びをした。

「さて！早く家に行こうっスー！！ウチの母ちゃん、怒るとメツチャ怖いんスよ〜だからほら！！」

「わっ!?!」

ジャンはシオンの手を引っ張って、自分の家へと向かって行った。

シオンに見えないよう…涙を隠して…。

しかし…シオンはその涙に気付いていた…。

## ジャンとの出会い（後書き）

作者「ここで、ジャンの紹介をしておきます！」

\*\*\*

名前：ジャン・ライドネット

年齢：十二歳

外見：跳ねた黒髪に黒目。

深緑のタンクトップにダボダボのズボンを着用している。

備考：三年前に父親が亡くなってからは母と二人で作物を育て、それを売ったり食べたりで暮らしている、母思いの優しい少年。  
現在、ある悩みを持っている。

\*\*\*

作者「まあこんな感じですよ。次回はナツが登場する…かも？」

ケルベロス「なんで疑問形なんや!？」

## 夜の会話（前書き）

この小説をよんでくれて、ありがとうございます。

## 夜の会話

あの後、ジャンに手を引つ張られたまま彼の家に着いた頃…日はかなり傾き、すでに夜になろうとしていた。

そして…もう遅いので、ジャンの家に泊まる事になったのだった。

「いんやゝ食った、食ったあゝ」

「おなかいっぱいだよ」

「…みんな、食べてすぐ寝ないで…／＼／＼／＼行儀悪いから…汗」

ジャンの家で夕飯を食べ終えた直後、横になった2人(?)を見て恥ずかしく思ったシオンは注意した。

「別にいいっスよ。それよりシオン…汗、流してきた方がイイっスよ」

「えっ? いいんですか?」

「ええって、ええって 女の子は清潔第一なんやから」

そう言ったのはジャンの母・ジエーンだ。

ジエーンはジャンとは違い、ベージュの髪に黒目だったが、目は同じだった。

「じゃあ…呼ばれますね」

シオンは笑顔でそう言うと、風呂場に向かった。

＊＊

ジャンの家の風呂はいわゆるドラム缶風呂だった。

だが、覗き防止の柵や雨除けのテントが張っており、快適だった。

「うっ…気持ちいい」

シオンがそのジャン家の風呂を堪能していた時、頭に男性の音が響いた。

(…相変わらずのようだな…お前は…)

(あれ？シンが話しかけてくるなんて…珍しいね？)

(…確かに…そうかもしれんな…)

シオンは驚く様子もなく、心の中で相手の男性　シンに言った。

彼は…シオンは肌身離さず持っている、ペンダント・常夜の石に宿るもう一つの意識。

シンは暫く間をおくと尋ねた。

(　　)　で、お前は何を悩んでいるんだ？

ストライクゾーン  
直球、まさにそれだった。

シオンは目を細め、雨除けのテントの天井を見上げ、言った。

(…なんでわかったの?)

(この状態になって3年…。それだけの時間を共に過ごせば…分かるに決まっているだろう…)

3年。

その言葉を聞いて、シオンは思った。

もう3年経つのか…あの牢獄から…あの人達に助け出されて…。  
シロン達の…力の制御者になって…。

そして…あの男に呪いをかけられ、シンと…体を一つにされてから…3年…。

シオンは目を一旦とじて…再び目を開けた時、シンに言った。

(もうそんなに経つんだね…)

(ああ…)

暫しの沈黙の後、シオンが言う。

(元に戻るよね?)

シンは少し間を置いた後、答えた。

(元に戻るではないだろう。必ず元に戻る…だろう、シオン?)

(そうだね…)

シオンは目を閉じ、今度は気になることをシンに尋ねた。

(ねえ、シン…ジャンさんが言ってたあいつらって…)

(恐らく…あの馬車の主人が言っていた人狼の盗賊だろうな…)

(やっぱり…)

シオンは黙った。シンも黙っている。

だが、ため息のようなものをつくと言った。

(…シオン、今お前が何を考えているかは…理解しているつもりだ…。だが、今は止めておけ…)

(うん…そうだね…)

その言葉を最後に会話は終わり、シオンは風呂から出ると、ジャン達がいる居間へと向かった。

そして…ジェーンとジャンと話していた。

「へえ〜シオンちゃんは隣国のレスターバからきたんかい？」

「ええ…マグノリアにある魔導師ギルドに入ろうと思って…」

「ってことは…シオンはあそこに入るつもりなんスね〜…」



真夜中、居間でシオンがジャンとジェーンと話していた時だった。

音が聞こえた。

「!！」

最初に気付いたのは、シオンだった。

「シオン、どうしたんスか？」

「…何か妙な音が聞こえる…」

野菜を齧る音と、噛み返す音、飲み下す音。  
それらが外 畑の方から聞こえてきた。

「ヤツらがきたみたいっスね…」

そう言っただけは、席を立った。

「およしよジャン！今度こそ殺されちまうよ!!！」

「大丈夫っス!!母ちゃんはシオンと隠れてるっス!!！」

そう言っただけで扉を勢いよく開けると叫んだ。

そこにいるであろう者達に…

「い、いい加減にするっスこの怪物兄弟!!!!オイラン家の畑をこれ以上荒らすんなら……?」

しかし、そこにいたのはジャンの知っている者達ではなく…

「……ア、アンタ……誰っスか？」

桜色の髪に鱗模様のマフラーを身に着けた少年だった。

## 夜の会話（後書き）

作者「ジエーンの紹介です」

\*\*\*

名前：ジエーン・ライドネット

年齢：TOP SECRET！

外見：ベージュの髪に黒目。

琥珀の髪留めをしている。

備考：ジャンの母親。

三年前に夫が亡くなってからジャンを女手一つで育てた。  
ジャンと同じ悩みを持っている。

\*\*\*

作者「以上ですが…なにげにエロいね…シンさん…。それにナツ…  
窃盗&つまみ食いしてるし…」（呆）

シン「気にするな」

作者「いや、気にするべきだからね…?」

ナツとの出会い・ジャンの決意（前書き）

作者「さて、今回はどんなお話かな？」

ケロちゃん「なんで語尾カタカナなん？」

## ナツとの出会い・ジャンの決意

シオンside .

その後、ジェーンさんがその男の子を家の中に入れた後、その男の子は野菜を猛スピードで食べていた。

男の子はジャンさんと同い年…つまり、私にとっては年上なんだけど…

年上に見えない…(汗

というか…絶対アレ、喉…詰まらせるよ…。

「オバちゃん！この野菜すっごくうまい！！！」

男の子は笑顔でジェーンさんに言った。

「ずっずっしいっすよ…それはオイラと母ちゃんが…一生懸命…  
「人間のお客さんなんていつ以来かね                   っ！そらっ、た  
ーんとお食べ」

少しムカついているジャンさんが男の子に文句を言う前に…ジェーンさんがその背中を叩き、黙らせてから少年の前に野菜を置く。

……かなりいい音したけど大丈夫かな？

「おっ あんがとオバちゃん！！」

そう言って、さらに食べる男の子に私は聞いた。

「ところで…あなたは？」

「オレ？」  
おひえ

「…ゴメン。答えるのは飲み込んでからでいいから。」

男の子が口に含んだまま答えたため、私は呆れていった。  
男の子は飲み込むと答えた。

「オレはナツ、ナツ・ドラグニル！オマエはなんていうんだ？」

「私はシオン、シオン・クラウディオだよ…で…こっ…」  
「ボクはフリーっ」「わいはケルベロスやで！」「…だよ（汗）」

なんでこうゆう時だけタイミングいいのかな…？  
しかも…順番に自己紹介してるし…打ち合わせでもしたの！？

ナツさんはフリーとケロちゃんケロちゃんの順にみると、それぞれに向かって言った。

「…なんかフリー…ドラグニル竜ドラグニルみたいだな！」

「いや…みたい…じゃないし…（呆）」

本物だからね…

「ケルベロス…なんかケロちゃんの方があってんな…」

「あ、それボクも思ってた」

「おっ、そうなのか？」

「どーゆー意味や!？」

……まあ、その姿を見たらそう思えるよ……。  
っていうかコレお約束なのかな……？（汗

私がそう思った時、遠吠えが聞こえた。

「この声って……狼？」

その途端、ジャンさんはドアを開けると、すぐ近くの柱を見て悔しそうに呟いた。

「クソッ……！またか……！」

「またって何がだ？」

ナツさんがきくとジャンさんは柱に張り付けてある……ジャンさんにとっては最も見たくないそれを取って、私達に見せてくれた。

「ヤツらの……人狼の盗賊三兄弟・“三つの牙”からの予告状っス……」

悔しそうに拳を握りしめて……言った。

side out .



ナツ・ジャン・ジェーンの順に風呂に入った後、全員居間に集まり、ジャンが話し始めた。

「あいつらは…オイラン家の野菜を食べてその味を気に入って…定期的にここに来るようになったんス…」

「あいつらって?」

「最近問題になつとる人狼の盗賊やな…」

首を傾げるナツをよそにケルベロスが言った。  
ジャンはそれに頷いた。

「…いつからここに来るようになったの?」

フリーはジャンを気遣い、心配そうに尋ねた。  
ジャンは俯くと辛そうな声で答えた。

「オイラン家は一か月前っスけど…この辺りに現れたのは半年前っスね…」

「「「!?!?!?」「」「」

ジャンのその言葉にケルベロス・フリー・シオンの3人が固まった。

「半年って…それじゃあ…」

シオンの言葉にジャンは悔しそうな辛そうな顔で頷き、シオンは口を押えた。

ただ一人…ナツはわかってないらしく、頭の上に“？”を浮かべていた。  
フリーはそんなナツの耳に小声で教えられたおかげで、やっと理解できた  
…

この辺りで無事な家は…ジャンの家だけと…

その事実で誰もが言葉を失った時、ケルベロスが言った。

「一か月か…随分ずいぶんと嘗なめられておるんやなあ…。なあジャン…その間に…自らの誇りを胸に戦ったのんか？」

ちよっ！ケロちゃんっ！？

「戦おうとしてるっスよ！………してるっスけど………！！」

ジャンはバツポの言葉に立ち上がると怒鳴ったが…あいつらに立ち向かった時のことを思い出し、黙ってしまった。

「…ムリなんスよ………いざ戦おうとすると…足が震えて…戦えない

んスよ……。あいつらに……“意気地なし”っていわれても……言い返せないんス……」

「そりゃあ……いわれてもしかたn……ぶっ!?!?」

ナツが余計なことを言う前に、フリーがナツの頬を殴った。

「いつてえ……!なにすんだよ!!!」

「ナツ!その先は言っちゃダメだよ……!」

「なんでだよ!!!?!?」

「あれ見ればわかるやる……」

そこには、椅子に座るとテーブルに突っ伏し、何度も悔しそうに咳くジャンの姿があった。

そして、その傍にいたジェーンがジャンの背中を擦りながら言った。

「ナツ君……相手の人狼達……元々は殺す事も躊躇ためらわない残酷な盗賊なんだよ……。だからこれは仕方ないことなんだ……」

「けどいいのオバさん!?!?畑が荒らされても!?!?」

「別にいいさ……野菜はまた作り直せばいい……。けど、ジャンは取り返しはきかない。私のあたしのたった一人の肉親だからね……」

その言葉で誰も……何も言えなくなった。

ひとまず解散した後……シオンはその予告状を自分が寝る部屋へと運

んだ。

そして…それを手にしたまま目を瞑り、意識を集中した。

その時…アレがきた。

それをみた後…シオンは目を開け、予告状を燃やしベッドに入ると眠った。

目を開けるとシオンは…青紫色の空に包まれ、青と赤の月が重なりあっている不思議な世界にある、薔薇の庭園ローズガーデンの真ん中にある噴水の前にいた。

でもそこは…世界のどこにも存在しない場所だった。  
何故ならここは…シオンの心が生み出した“心の世界”………いつ  
てみれば精神世界だからだ。

そして…シオンがここに来る用はたった一つだけ…。

「呼んだか？シオン」

「シン！」

そう…彼 シン・ウルムグンに会うためだ…。

シンは灰銀の髪に紅とエメラルドグリーンの虹彩オッドアイ異色の瞳を持つ青年で、シオンより10コ上の20歳の青年だ。

「シン、話があるの…聞いてくれる？」

すると、シンは鼻で笑い言った。

「愚問だな…俺は元からそのつもりだが？」



その次の日の昼、ナツとフリー、ケルベロスはジャンの手伝いを、シオンは家でジェーンの手伝いをしていた時だった…。

ジャンの手伝いをしていたナツとフリーが言った。

「ねえジャン！！ボクたちにまかせてよ！！！！」

「何をっスか？」

「“三つの牙”の退治だよ！！予告状がきたってことはソイツら来るんだろ！？」

二人の発言にケルベロスが驚いた。

「本気かいな？！フリーはともかく、ナツは大丈夫なんか！？」

「「それどーゆー意味！？」」

フリーとナツがハモった後、一旦咳払いをしてフリーが続ける。

「だって…！このままにしとくなんてできないよ…！それに…」

すると、フリーは何かを企んだような顔をして言った。

「それにさ、てケルベロスうゝ…頑張ったらシオンの特製デザート食べれるかもしれないよ?」

その言葉で、ケルベロスにスイッチが入った。

「いよっしゃああああああ! ! やったろうやないかああああああああ! ! ! ! !」

と、盛り上がってるケルベロス)をみて、ジャンは笑った。

「フリー、ナツ、ケルベロス…アンタら…いいヤツっスね…。けど、ケッコウ! !」

その瞬間、ケルベロスの上に“ゴーン”という字の石が落ちてきた。

「な、なんでだよ! ! ?」

「オイラとしてもありがたいつスよ?でも…それじゃあダメなんス! ! オイラは…オイラは」

オイラは自分の力で道を開きたいんス！！そして…意気地なしを捨てるんス！！！！」

そう言い切ったその瞳には強い意志が宿っていた。

「ジャン…！「フリー、やめとけ」ケルベロス！でも…！！！！」

「今のジャンの言葉を聞いたやろ…？それに…わいはあれと同じ目を知っとるんや…。ああなったら何も言わん方がええ…。わかったな？」

「…うん…」

フリーはまだ納得がいかないようだったが、渋々了承した。

そして……夜が来た

⋮

真夜中の戦い〜前編〜（前書き）

作者「今回は2話に渡って書こうと思います!!」

## 真夜中の戦い〜前編〜

ジャン side .

その日の夜…みんなが寝静まった頃、オイラはクワを背負い、手頃な木の棒を傍らにおくと…父ちゃんの形見の古びた短剣タガを見ていた。

その時…昨日の夜にバツボが言った言葉を思い出していた…。

“随分すいぶんと嘗なめられておるんやなあ…。なあジャン…その間に…自らの誇りを胸に戦ったのんか？”

「自らの誇り…か…。考えた事なかったっすね…。そういえばよく、父ちゃんも言ってたっけ…」

オイラの父ちゃん…ウォーカーはせいてんだいまどう聖十大魔道の一人で、昔、荒れ果てていたこの辺りの土地を一人で開拓した偉大な人で、よく話を聞いていた。

そしてなかでも…この言葉は特に印象的だった。

“いいかジャン？誇りつてのは己の覚悟だ！その事を忘れんなよ？”

あの時は…どうゆう意味なんだろうと考えていたけど…今ならわか

る。

(父ちゃん…見てくれっス…)

オイラは短剣ダガーを腰に刺し、棒を持ってドアを開けた。  
そこにヤツらは…いた(…)

「お　　？意気いげき地なしのジャン君じゃあないですか…」

わざと敬語を使って話している人狼兄弟の次男・紅牙こうが。

「ま　　た出てきたのかよオ　　？ヒヒヒッ！」

変な喋り方をする人狼兄弟の末っ子・狂牙きょうが。

「そんなもの持って…これから畑仕事でもするのか…？ジャンよお…？」

そして…一番凶悪な人狼兄弟の長男・王牙おうが。  
いつ見ても怖い…でも…！！

「…い、いい加減にするっス！！家ウチの畑をこれ以上荒らすと…」

「荒らすと…なんだ？」

王牙は自分の爪をギリリと光らせ、脅してくる。

「…でましたねエ…お決まりのセリフが…」

「ワインとか、チイズウーとかでもくれんのかア？ヒヒヒヒッ！」  
紅牙は丁寧だけど嫌味をたっぷりこめて、狂牙は名前の通りの喋り方で挑発してくる。

…足が震えてくる。でも…っ！！  
オイラは腰の短剣ダガーの握り手を握り締めて深呼吸をし、あいつらを睨んで叫んだ。

「ぶつとばすっ！！！！！」

そして駆け出し…棒を振り上げて…雄叫びを上げた。

「うおおおおおおおおっ！！！！！」

オイラは…意気地なしじゃないっス！！！！！！

side out .

真夜中…ジャンは雄叫びを上げながら人狼兄弟に向かって走っていた。

「うおおおおおおおおっ！！！！！！！」

「ちっ…。紅牙、狂、やれ…」

「やれやれ…仕方ありませんねエ…」



「まかせとけって王のアニィ！」

そう言うと紅牙はジャンの頬を殴り、狂牙はその後…腹に蹴りを入れ、ジャンを吹っ飛ばした。

その反動で落とした棒を紅牙が拾い、ジャンに向かって狂牙が言った。

「おいおいおいおいーい…？ジャ　ン？今なんて言ったよオ？」

「聞き違いじゃなければ…“ぶっ飛ばす”って聞こえましたねエ？」

バキッ！！

簡単に紅牙は木の棒を折った。

ジャンは恐怖と痛みを感じていた。

(い…痛い…！けど！)

ジャンは立ち上がると、背中の中をクワを取り、叫んだ。

「ああ！！オイラはお前らをぶつとばす！！！！」

「ヒヒヒヒッ！！ぶつとばすって一人かア？…d「一人じゃねえ！二人だ！！！！」

「「「「！！！！！！？」「「「「

ジャンは突然、背後から聞こえた声に驚くと振り返ってみた。そこには眠ったと思っていたナツが屋根の上にあった。

「ニシシシッ！オレがいればさつきよりはマシなんだ…ろっ!？」  
その瞬間、ナツは足を滑らせ「ぬゝあゝ」  
か叫びながら落ちた。 つ!?!?」と  
だがすぐ起き上りジャンの近くに走って来た。

「ナ…ナツ？寝たんじゃあ…なかったんスか？」

「はあ？こんな面白そうながあんのに寝るワケねーじゃん!！」

「イヤ、全くおもしろくないっスから…でも…」

「おう!！」

二人はキツと紅牙と狂牙を睨むと走り出し、攻撃した。  
その攻撃を受けた紅牙と狂牙は二タリと笑った。

「ほほう…聞き違いではなかったみたいですね…」

「ヒヒッ…イイじゃん、イイじゃん 遊んでやんよオ!!!！」

そういうと、紅牙はジャンと狂牙はナツに向かって行った。  
その様子を見た王牙は喉を鳴らせて笑った。

「クククッ…紅牙も狂牙も付き合がいいな…」

そして…畑の野菜を取ろうとした時、男が背後にいた

。

全身を黒一色で包み、片目を前髪で隠した白髪の男が……いた。  
王牙は肩越しに、その男に向かって言った。

「この気配…ディオロットの旦那じゃねえか…」

男　ディオロットと呼ばれた男は鼻で笑うと言った。

「…相変わらずくだらん遊びをしているようだな、王牙。まあいい…今回は仕事の依頼に来た…」

ディオロットの発言に王牙は驚いた。

いつも神出鬼没でつかみどころのない男だったが…逆らってはいけないと本能で悟っていた。

その男が自分に依頼してきたのだ…驚くのも無理はない。  
ディオロットは続ける。

「…内容はある人物の搜索だ。報酬は15万<sup>ジュエル</sup>…どうだ？やるか？」

「ああ…やるぜ…その前に、あの“バカ”共を片付けてからでいいか？」

王牙は間髪いれずに答え、ナツとジャンを親指で示した。  
ディオロットはその二人を一瞥すると、背を向け答えた。

「私には関係のないことだ…だが、依頼はすっぱかすなよ…じゃあな…」

そう言うとディオロットは歩きだしたが、すぐに立ち止まると言

った。

「言い忘れていたが…そいつらはかなりの手練れだ…見た目に騙されるなよ…」

意味深な言葉を言った後、ディオロットは消えた。

その直後、ジャンが紅牙のパンチをモロに喰らった拍子にクワは折れ、そのまま膝をついた。

「ぐあつ……………！」

「ジャン！」

「どこ見てんだよオ！！！」

「がつ……………」

ジャンを心配して振り向いたナツに、狂牙は蹴りを喰らわせナツを吹っ飛ばし、押さえつけた。

ジャンは殴られた箇所を押えながら立ち上がった。

「いつ…てえ……………！」

その時、王牙がジャンに近づいて囁いた。

「おい、ジャン…俺達はここの野菜…結構気に入ってた…。だから、その野菜を作ってるお前は殺さないが…これ以上抵抗するってんなら」

お前のお袋とあのガキを殺す……………」

ジャンside .

今、なんて言った？母ちゃんとナツを……………殺す？

「お前は確か…作物作りに関しては天才なんだろう？なら…お前がいればこれは食える…いくらでもな…」

ニヤリと笑い、王牙は囁く。それに、狂牙と紅牙がつなく。

「だけどよオ…オマエらはオレたちに逆らっちゃまったよなア？」

「だから…あのババア…いや、君の母親は見せしめですよ…」

見せしめ？  
たったそれだけのために…母ちゃんを殺す？  
怖いけど…あの優しい母ちゃんを…殺す？

「させないっス……………！！」

オイラは腰の短剣ダガーの柄に手を置いた。  
その途端、王牙達の目つきが変わった。

「…ジャン…なんのつもりだ？」

「まさか…その古びた短剣を抜くつもりですか？」

「そんな古びた短剣でナニができるんだよオ？」

王牙達の言葉を無視して、オイラは目を閉じた途端……父ちゃんの最後の言葉が脳裏に浮かんだ。

“ ジャン……お前もいつか戦う時が来る……。その時お前は……何のために戦う？”

「オイラは………」

そして……昨日の晩……母ちゃんの言った……あの言葉も……。

“野菜はまた作り直せばいい……けど、ジャンは取り返しはきかない……<sup>あたし</sup>私のたった一人の肉親だからね……”

その瞬間、決まった。

オイラが戦う理由は…父ちゃんの残したこの場所と…そして

「オイラにとってもそうっすよ！！母ちゃん！！！！！！」

母ちゃんを守るためっす！！

そして…短剣ダガーが抜いて、王牙の牙を叩き斬った。  
暫く…誰も動けなかった。

だが……オイラの攻撃で王牙はキレたようだ。



「っ……ああ……わあ……たよジャン………………てめえを殺す！」

そう言つて王牙はオイラを攻撃してきた、が、オイラはそれを剣で受けながら叫んだ。

「何度でも言つてやるっス！！お前らをぶつとばす！！！！！！」

その瞬間、オイラの腹に王牙の拳が当たり、オイラは血を吐いて……宙を舞つた。

side out .

暫く経つて……ジャンが落ちてきた時、狂牙は笑つた。

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！ヨエ　　なア！！！」

「さすが……王牙兄さんですね……」

そんな紅牙達に王牙は近づくと言つた。

「狂牙……お前はそのガキを殺せ……紅牙は中で寝てる婆さんをやれ……」

「了解です」

「リョーカイだぜエ」

そう言つて、ナツに近づくと紅牙と家へと近づくと狂牙。

「ま…待つっスー!!」

「まだ…終わつてねえ!!」

そう言つてジャンとナツが立ち上がるが、紅牙はナツを蹴り飛ばし、ジャンは王牙に頭を地面に押さえつけられた。

「しぶといですねえ…でも、これで終わりですよ?」

「そうゆう事だ。諦めるんだなあ…ジャン」

そう言つて紅牙はナツの、王牙はジャンの喉元に爪を当てる…鋭く尖った爪を…。

(もう…ダメなんスか…?これで…本当に…)

この状況にジャンが弱気になったその時…!

「いい加減に…しなっ…さいっ!!」

凜々しくも、かわいらしい声が響いた。と同時に、狂牙が吹っ飛ばされた。

その声に…ジャンとナツは聞き覚えがあつた。

王牙と紅牙は突然のその声に驚いたと同時に…茂みから飛び出した二つの影によって、狂牙がいる方向に飛ばされ、見事に空中でぶつ

かった。

その二つの影が着地した時、正体が分かった。

一人は紫色の帽子を被った同い年くらいの少年、一匹は翼を生やした黄金の瞳を持つライオン。

少年は二人に駆け寄ると言った。

「ナツ、ジャン！！二人とも大丈夫！？すぐ、手当するから！！」

「大丈夫そうやないやろ…フリー！今の犬ところが吹っ飛ばかんかったらどないする気やったんや？！」

「それは……ま、まあなんとかなるよ！！！！」

「アホか　　っ！もう少し遅かったら完全にアウトになっ  
とったんやで！？」

「うっ……ゴメン、ケルベロス……」

「フリーとケルベロスう！！！！？」

ナツとジャンは少年とライオン　人間の姿のフリーと真の姿とな  
っているケルベロスを見て驚きの声を上げた時、足元から先程の声  
がジャンに言ったその時、吹っ飛ばした本人　シオンが来た。

「シオンっ！？今のシオンがやったのか！？」

「あはは……まあね。それより二人とも…大丈夫だったみたいだよ

かった…」

「いや…全然大丈夫じゃねえよ…。オレ…手が出せなかった…」

「オイラもっス…」

「そんなことないよ…二人はよく戦ったと思うよ…だから…元気出して?」

そう言つてシオンはニコツと笑つた。

途端、その笑顔を見たナツとジャンは顔を真っ赤にした。

「／／／／／お…おう!」

「／／／／／あ、ありがとうっス…」

「?どういたしまして あっ、そうだ…二人とも…手を出してくれないかな?」

「「?」」

シオンに頼まれ、二人が手を出すと…シオンはその手にタッチした。

「「え?」」

「選手交代っ あとは、私に任せてね!」

そう言つとシオンは“三つの牙”の下へと歩き出した。

「シ…シオン一人でやんのか!」

「危ないっスよ!!」

「大丈夫…絶対、大丈夫だから…信じてて?それに…一人じゃないし…カツコいい二人の姿を見て黙ってたら…“七騎士”<sup>セブンウォーリアーズ</sup>の皆に怒られちゃうしね!!」

と、またもあの惱殺スマイルでそんなこと言うものだからさらに二人の顔は赤くなった。

そして…シオンは“三つの牙”のすぐ傍に来ていた。

「嬢ちゃん…俺達になんか用か?」

「…ジャンさんに言った言葉…撤回して…謝罪して下さい。そして…二度とここには来ないください!!」

シオンがそう叫んだ途端、王牙が傍にあった木を殴り折った。

そして…シオンを睨んで言った。

「ほづ…断ると言ったらどうすんだ?」

シオンは目を閉じた。

そして…暫く間をおいてから…目を開くと“三つの牙”を睨み、凜とした力強い声で言った。

しかし、それはシオンの声ではなかった…。

「貴様らの頭を冷やして、謝罪させるまでだ」

『っ!?!?』

その変貌ぶりに、フリーとケルベロス以外は驚いていた。

その間に少しずつシオンの姿が変わり…やがて、灰銀の髪に紅とエメラルドグリーンオッドアイの虹彩異色の瞳を持つ青年になって、再び宣言した。

「もう一度言うぞ…先程の言葉を撤回しろ。さまなければ貴様等の明日は保障できんぞ!」

両手に拳銃を握り、燃え盛る炎の様な怒りを瞳に秘めて…高らかに宣言した。

## 真夜中の戦い〜前編〜（後書き）

作者「今回登場したキャラクターの設定です！」

\*\*\*

名前：ウォーカー・ライドネット

備考：ジャンの父でジェーンの夫。

三年前に死亡。

せいてんだいまとつ  
聖十大魔道の一人だった。

\*\*\*

作者「次はヤラレキャラの設定」

\*\*\*

名前：王牙<sup>おつが</sup>

備考：黒い毛を持つ、人狼の盗賊兄弟“三つの牙”の長男。

一年前、ジャン達が住むこの土地に来て、住人を苦しめてきた。

名前：紅牙<sup>こうが</sup>

備考：紅の毛を持つ、人狼の盗賊兄弟の次男。

敬語を使って話すが、人を馬鹿にしているような言い方しかない。

名前：狂牙きょうが

備考：紫がかった黒い毛を持つ、人狼の盗賊兄弟の末っ子。  
薬物中毒者ジャンキーのような喋り方をする。

\*\*\*

作者「なんか…自分で書いててムカつくんですけどこの犬っコロ共…。シオンちゃん、シンさん…やっちゃって下さい!!!!!!」

フリー「あれ？もう一人は？」

作者「……次回もお楽しみにね」

フリー「あつ逃げた」



## 真夜中の戦い〜後編〜

真夜中

対峙するは……青年と人狼の盗賊三兄弟“三つの牙”。

「さて……どうするつもりだ？」

拳銃で肩を叩きながら、青年が言った。

その言葉で、先程の豹変ぶりを見て固まっていた王牙は我に返り、状況分析を始めていた。

（な、なんだ一体？嬢ちゃんが男になりやがっただと……！？それにあの拳銃……一体どつから出したんだ？しかも……さっきの嬢ちゃんとコイツ……最近、盗賊仲間の間で噂になつてる例の盗賊ロバースキラー駆除屋と特徴が同じ髪色じゃねえか……？まさか……いや、それはねえな……）

王牙は考えを取り消すと、弟達・紅牙こうがと狂牙きやうがに指示した。

「紅牙、狂牙……予定変更だ……先にあの小生意気な男を殺れ！」

「ケケケケツ！王のアニイ……」

「言われなくても……そのつもりですよ……！！！」

そう言うと、紅牙と狂牙は青年に叫びながら襲い掛る！

「バラ肉にしてやんよオ

ツ……！！！！！！」

「覚悟……!!」

しかし、青年はそれを目を細めて……後ろに跳んだだけでかわした……。それを見たナツとジャンは目玉が飛び出るくらい驚いた。

「あっさり避けたあ

っ!??」

「っていつか今……!!後ろに跳んだだけでかわしたんスか!??」

そう言つてケルベロスとフリーを見るジャン。

ケルベロスは唸ると苦笑混じりに答えた。

「うーん……やっぱ、驚くわなあ……」

「まあでも、シンが言うには……『相手の動きをみてれば簡単』らしいけど……そんなことできるのって……あんまないよね?」

ナツとジャンは激しく頷き、これに同意した。

しかし、驚いているのは紅牙達も一緒だった。

「何っ……!!?」

「ッ!この野郎オ……!!」

「(今のあの動き……まさか……!!?) まで狂牙!!」

王牙の静止の声も聞かず、狂牙はシオンに突っ込んだ。  
そんな狂牙に青年　シンは拳銃を向け発砲した……。

「ぐえっ…！」

「狂牙！この…っ！？」

紅牙は目を瞠みはった…。

何故ならシンが…いつの間にか目の前にいて、足を大きく振り上げていたからだ。

「はあっ…！！！」

「んがっ！？？」

シンがそれを振り下ろし、見事に踵落としを紅牙の頭に喰らわした。その攻撃に紅牙と狂牙がキレた。

「っ…！！いい気になんじゃねえよこの野郎がぁ…！！！！！！！」

「ぶっ殺してやるっ…！！！！！！！」

「さて紅牙！狂牙！その野郎は…！！！」

しかし王牙の言葉は完全に頭にきている紅牙と狂牙には届かず、二人はシンに突っ込んだ。

それをシンが待っていたことも知らずに…。

シンは少し腰を落とすと、両手を前に突出し、魔力を込めた。そして、叫んだ。

「バーストブリッド！」

すると、巨大な火の玉が飛出して紅牙と狂牙に当たり二人を10m  
くらい吹っ飛ばした。

それを見たケルベロスとフリーは……

「…かなり飛ばしたなあ…」

「記録更新したんじゃないの？」

と、言い…それにナツとジャンが、

「…そんなこと言ってる場合…!!?」「…」

と、突っ込んだ。

その間に…シンは武器を剣に換え、王牙を睨んでいた。

「次は貴様の番だな？」

「ぐっ……まさかとは思いが…お前があの盗賊駆除屋ロバースキラなのか!？」

睨まれた王牙は、シンに向かって大声で尋ねた。  
それを聞いたジャンが驚く。

「盗賊駆除屋?! ってまさか…あの!？」

「なんだよジャン、知ってるのか？」

ナツの質問にジャンは頷くと説明し始めた。

「盗賊駆除屋ロバースキラってゆうのは最近…というか二週間前からなんすけど、

盗賊を退治している魔導師のことっス。確か…ARMアームっていう魔法アイテムの使い手でもあり、失われた魔法ロストマジックの使い手でもあるらしいッス」

そこで一旦区切ると、ケルベロスが言った。

「まあ…シンの本当の力はここからやけどな」

「えっ？どついう事だ（っスか）？」

「見ればわかるよ。それに

怒らせたら、ボクらでも止められないしね」

『そこ』 “付ける所じゃねえだろ！！！”

と、フリーが妙な所に” を付けた為にツッコミをナツとジャン、ケルベロスが入れた直後、王牙はシンに左腕で攻撃した。それをシンは避けずに受け止めた。

「なっっ！！？」

「受け止めたあ！？」

シンの行動にナツとジャンは目が飛び出るほど驚き、攻撃した王牙ですら驚いた。

（うわー…シン、かなりキレイてるね…）

(あの王牙っちゅうヤツ終わったな…)

但し、フリーとケルベロスだけはシンの行動を見て、その心情を察し、合掌した。

「なっ…てめっ　「黙れ」っ!？」

王牙はその先の言葉を紡ぐことができなかった。  
シンに顎を掴まれていたからだ。

その状態でシンは言う。

「貴様…自分たちが何をしてきたか…犯してきたことを分かっているのか？」

シンは静かに、それでいて少しずつ殺気と握力を強めながら…言葉を紡ぐ。

「貴様等は…どれだけの命を蔑ろないがしにしてきた？それでいて…今度は彼処ないがしにいる少年の母親と、無関係の少年の命を蔑ろにするだ…？」

そう言つて、剣を地面に刺すと先程、王牙が折った木に投げ飛ばして叫んだ。

「ふざけるな！貴様等の様な輩に、命を弄ぶせつめつ権利などない！」

( ) (いや…相手、気絶してるのにそんな事言ってもムダじゃあ…?)  
( )

ナツとジャンは、今の衝撃で気絶している王牙に向かって言うシンに、心の中で突っ込んでいる間に、フリーとケルベロスがシンの方に行った。

「シンー…相手、気絶してるよー？」

「ム？あれ位で気絶するものか…？」

「『あれ位で』やないやろ？あれ位で気絶しない方が可笑しいで…」

「そうなのか…？」

「「そうゆうモンや（なの）！」「」

と、怒鳴るフリーとケルベロスをシンは一瞥すると、ナツとジャンを見た。

すると、光に包まれ光が晴れた時にはシオンがいた。

「「っ！？」」「シン！？何勝手に交代チェンジしてるの！？」

突然シオンが現れたために驚くジャンとナツ、そして突然のことに驚いているのはシオンも同じだったようだ。

常夜の石からシンが言う。

（俺は疲れた。ま、後は自分でなんとかしろ）

「何とかしろじゃないでしょ　　っ！ー！」

「シオン、落ち着いて　　っ！」

少し落ち着いた後、シオンはナツとジャンに説明した。

「「呪い？」」

「そう、呪い。三年前に…私とさっきの男の人、シンっていうんだけど…ある男の人に呪いをかけられたの…」

「どんな呪いなんだよ？」

ナツに聞かれると、シオンは少し苦笑し続けた。

「簡単にいうと…」融合した人物の性格や姿を、あるキツカケで入れ替える”呪いで、私が今いる世界を”表”とするなら…シンは今”裏”の世界にいるの。」

「そのキツカケってなんなんスか？」

「キツカケは…」感情”で…私とシンの感情が同じ時はシンに、異なる時は私になってるって事だよ」

「え、えーっと…？」

ナツは理解できてないようなので、ジャンが要約して言った。

「つまり…二人とも同じ事を思っている時はシンさんに、そうじゃない時はシオンの姿になってるって事っスね」



「おおなるほどー!!」

「ナツう〜？<sup>ホントー</sup>本当に分かってるの？」

フリーが聞くと間髪入れずに

「いや？」

と、答えるナツに…

『うおいつ！！それだと意味ないじゃん！！』

と、全員でツッコみを入れた。

するとナツはニカツと笑って言った。

「ははっ！でもよー勝てたからいいじゃねえか。なっ？」

その言葉に、シオン達は顔を見合わせ、クスツと笑った。

「とりあえずは私達の…」

『大勝利だ　　っ！！』

シオン達は勝利に喜んで、笑いあった。

この時、その様子を見ている者がいた。

「フム…中々やるな…シオン・クラウディオ…」

空から漆黒の翼を生やしている男　ディオロットが観察していた。

眼下には丁度、シオン達が見えるが…シオン達には肉眼でディオロットを見る事はできない高さから…シオン達の…否、シオンの戦い方を観察していた。

「だが、二人ともまだ成長段階のようだな…。暫しは監視した方が良さそうだな…」

そう呟くと翼をはためかせ、飛んで行った…。

ジャンとの別れ・シオンとナツ…フェアリーテイルへ…（前書き）

たぶんこれで、この話は終わりです。

っていつか…こんな調子だと…結構ヤバいな…。

ジャンとの別れ・シオンとナツ…フェアリーテイルへ…

Free side .

それからしばらくたって…辺りが明るくなった頃…

バツチイ

ンッ……

と、かなりいい音がジャンの家から響いた。

想像つくと思うけど…この音はジャンのお母さん・ジエーンさんが  
ジャンの頬を思いつきり叩いた音。  
もう“バツ”から“チイ”までのタメがスゴいよ…。

因みにボクらはそれを…ナツ口を開けて、シオンとケルベロスは「あゝ…」とすまなさそうに、ボクはシオンの後ろに震えながら隠れて見てた。

「三つの牙」と戦っただって!!?どうして…そんな危ない事したんだい!!!」

ジエーンさんがジャンを怒鳴りつけ、さらに震える。

こ、怖すぎるよ…ジエーンさん…。

ジャンは叩かれたほつぺたを擦りながら、後退りしながら言った。

「ちょ…ちょっと待つつス母ちゃん!!シオン達の力を借りてあいつらを倒したっス!!あいつら、泣きながら逃げて行ったっスから…これで安心「死んでたかもしれないんだよ　っ!!!!!」」

ジエーンはジャンに顔を近付け、さらに大声で怒鳴る。  
そして、手を挙げる。

「この……」

( (また叩かれる!) )

そう思ったジャンとナツ、ボクは目を瞑った…。  
でも、いつまで経っても痛そうな音はなかった…。  
ボクが恐る恐る目を開けると…そこには……

「……無事で……生きててよかったよオ……ジャン……」

泣きながら……ジャンを抱き締めるジエーンさんの姿と……

「……お母様お久しぶりです……母様……」

同じ様に…肩を震わせてジーンさんを抱き締めるジャンの姿があった……。

「うっ……あ、あかんわ……。涙腺が緩んで…涙が止まらん……」

その様子を見て、ケルベロスはもらい泣きしてて…。

「へへっ よかったなあ、ジャン！」

ナツはジャンに声をかけた。

「一件落着ってやつだね ねー、シーオンー」

「……そうだね……」

あれ？

「シオン…どうかしたの？」

「え？……なんでもないよ？」

そう言っつてシオンは笑つてたけど…笑つてなかつた。

いつものシオンの笑顔は…見てることちも笑顔になるのに…今回は  
そうじゃなかつた。

今回のシオンの笑顔は…

シオンには似合わない、“作り笑い”だった…。

side out .



時間は変わりお昼頃…シオンは小高い丘にいた…。  
両膝かひざを手で抱えた、いわゆる体育座りをして…空を見ていた。

(…どうしたシオン？元気がないようだが…？)

「…そうかな？」

周りに誰もいないため…シンの問いに、シオンは声に出して答える。  
するとシンはため息をつき、言った。

(お前は…何かあると誰もいない場所に来ては…今の様な座り方を  
して空をみる癖があるからな…。すぐに分かったぞ？)

「!? 私そんな癖があったの!? っていうかシン！何で知ってるの  
!?!」

(…先日と言ったはずだが?)

「え?…あ」

シオンは一昨日の夜…入浴中にシンが声をかけてきた事を思い出し  
て顔を赤らめ、膝の間に顔を埋めた。

「うゝ…ノノノシンのイジワルうゝ…」

(?俺は何もしていないが?まあ、そんな事は兎も角…どうしたんだ?)

若干シンの言葉に傷ついたが、シオンは顔を上げて言った。

「実はね…お父さんとお母さんの事…思い出してたんだ…」

Free side .

「何んてえ！？それホンマかナツ!?」

お昼ご飯を食べてた時に…ナツの言葉を聞いたケルベロスが叫んだ  
(因みにご飯はオニギリ)。

それをボクは「汚いなあ…」と思いながら眺めていた。

「ホントだつて！つていうか…そうだったら、そうとそうと言えよ  
！」

「…二人とも…。喋るか食べるかのどっちかにしてくれないっすか  
…?」

負けずに言い返すナツに、ジャンが呆れながらツッコミを入れ、ケ  
ルベロスとナツはすぐ飲み込んだ。

すかさずジャンが「ちゃんと噛んでから飲み込んで！」と、再びツ  
ッコむ。

まあ、聞こえてないみたいだけどね…。

理由は…

「何やお！？ナツが言わんかったのが原因やないか！…話しとっ

たらわいらも話しとつたわポケエ!!」

「はあ!?勝手にオレのせいにすんなよ!!ってか!誰がポケだ!」?

「おどれ以外に誰がおるっちゅーねん!!」

口喧嘩になってたから。

「あゝあゝまた始まった…。どのくらいぶりだろ?確か半年ぶりくらいだよね…」

「半年って…意外と期間、長っ!!」

ボクの独り言にジャンがツッコみ、それにボクは「まあね」と答えた。

あ、そーいえば…

…シオンとボクらが会って…どのくらいだったけ?確か…あの日の一週間後…だったかなあ?

そう言えば…ボク、そのあの日って何のことが知らないんだよね…。まあ知ってる人はいるはいるけど…

「第一なんだよアレ?!どっからどーみても、お前に見えねーよ!!」

「うっさい!!わい自身も気にしとんのやから、ほっとけえ!!」

口喧嘩続行中だし…。

はあ…まともな答えしてくれるのってジャンやジェーンさん…それに…  
そこでボクの手は止まったん停止し、再び動き出した時…

「あ　　っ！そうじゃん！…シンに聞けばいいんじゃない！…」  
『うるさい！！いきなり大声出すな！！！！』

【しばらくお待ちください…】

「で、フリー…なんでいきなり叫んだんや？」

落ち着いた時にケルベロスが聞いてきた。

ちなみに、ボクの頭にはタンコブが三つできていた。  
理由は簡単、ケルベロス達が殴ってきたから。  
っていうか…確かに叫んだボクも悪いけど…何でみんなしてボクのこと殴る必要があるの！？

反論したい気持ちを抑えて、ボクは聞いた。

「えーっと…あの日の事知りたいなあ…って思って…」

「……あの日…か……。すまんがわいの口からは…いや、絶対にいう事はできへんのや…。それがフリーやバツボの頼みでも…な」

また？

実をいうとこの質問…セブンウォーリアーズ七騎士のみんなにもした。

けど…回答はみんな「言えない」とか「知らない方がいい」って言うってた。

なんで？

この質問をすると…みんな口を揃えてこう言うんだ。

「シオンのため」だって…。

だったら教えてよ…。

だってシオンはボクに…ううん、ボくらにとっては大切な存在で…  
ボクにとっては初めての…力の制御者なんだから…。  
なのに…どうして教えてくれないの？

ひよつとして…。

ケルベロスはボクの…ボクらのこと信用してないの？

不意にそんな事を思ってしまった。

そんなこと…あるはずなのに…。

まあその後、作業を再開したから…忘れたけどね

side out .

シンside .

(…成程な。それで元気がなかったという訳か…)

「…ん」

あの後…俺はシオンに元気がない訳を聞いて納得した。

何でも、今朝のジェーンとジャンのやり取りを見て、両親を…殺された両親の事を思い出してしまったらしい…。

無理も無い…当時のシオンはまだ5歳の子供だったのだから…。その頃の幼いシオンにとっては…あまりにもその現実は酷だった…。

奴め…何度俺を怒らせれば気が済むんだ？

もし体があつたら、俺は拳を握りしめていただろう…。それこそ…血が出るまで…。

俺は…元凶を知っている。

だからこそ…一刻も早くシオンの体を取り戻す。

「ねえシン…一つ聞いてもいい？」

(なんだ?)

シオンは間をおくと言った。

「私の前から…消えたりしないよね？」

(当たり前だ。何故俺が消えなくてはならんだ?)

俺がそう答えるとシオンは「そう言うと思ってた…」とって微笑んだ。

その笑顔は…天使のようだった…。



side out .

その後…シオンはジャンの家に帰り、家の中で会話している時にあ  
る事を話された。

「え…ええええええっ！！？ナツさんって…フェアリーテイルの  
方だったんですか！？」

「そんなに驚くことか？」

シオンのオーバーリアクションに半場呆れたような、傷ついたよう  
にナツは言った。

実は…ナツはあの魔導師ギルド…フェアリーテイル“妖精の尻尾”の魔導師らしい。  
そして…元々シオンは妖精の尻尾に入るつもりだった。

だとしたら…シオンのとる行動は一つ。

「あの…ナツさん…フェアリーテイル妖精の尻尾に連れて行ってくれますか？」

「べつにいいぜ？けどその代り…」

ナツはズイツと顔を近づけて言った。

「オレのことは“ナツさん”じゃなくて“ナツ”で、タメで話すこ  
と…！いいいな？」

「あ……うん、わかったよ…ナツ…さん／＼／」

その途端、ナツがズッコケたのは言うまでもない。

＊＊

その日の夕方：小高い丘にシオンとナツら五人（？）と、ジャンとジェーンの親子、それにバツボの制裁<sup>リンチ</sup>で改心した“三つの牙”がいた。

「本当に行くんスか？」

「うん…元々そのつもりだったから…」

「そうっスか…。また会えるっスよね？」

「違うぜジャン！また会おうだろ？」

「！そうっスね！」

シオンとナツ、ジャンはまた会うことを約束し…。

「はい！ケロちゃん、フリー君の大好きなパンプキンクッキーだよ  
「！」

「おおっ、おおきになあジェーンはん！！」

「わーい ありがとうジェーンさん！！」

ケルベロスとフリーはジェーンのお手製クッキーを買っていた…。  
そして…別れの時。

「それじゃあ…」

「またな！ジャン…！」

「四人とも…また必ず会おうっス〜！！！」

そう言って…シオンとナツ達はジャン達から離れていった。

ナツは自分の家に帰るため…。

シオンはこれから働き、自分の家族と呼べる場所に行くため…。

その場所の名は

フェアリーテイル  
妖精の尻尾……。

ジャンとの別れ・シオンとナツ…フェアリーテイルへ…（後書き）

いよいよ…フェアリーテイルに行きますよ…。

主人公のプロフィールは作成中ですので、しばらくお待ちください。

主人公達のプロフィールっ！！（前書き）

タイトル通りです。

ついでに言うと、今回出てくる人外キャラレジエンスは擬人化しています。

## 主人公達のプロフィールっ！！

どうも皆様こんにちは、作者の月の歌姫です。

シオン「主人公のシオンです」

シン「サブ主人公のシンだ」

今回は主人公達のプロフィールです。

シオン「主人公…達？」

シン「他にもいるのか？」

いるっていうか…つい書きちゃったてへっ

ドゴオ！！ シオン以外に殴られたWWW

いたたたた…もう！何で皆して殴るのさ！？  
しかも、シンさんまで！！

シオン以外「お前が気持ち悪いからだ！！」

ヒドッ！？

それが作者おやに対していう事セリフかあ！？

シオン「ま、まあまあ…それよりプロフィールの方を…」

おっと、そうだった…危ない危ない。  
ではまず、シオンちゃんから！！

シオン「これが私のプロフィールです」

\*\*\*

名前：シオン・クラウディオ

一人称：私

年齢：原作開始は16歳。

身長：156cm（原作開始時）

体重：TOPトップ SECRETシークレット！

好きなもの：ギルドの皆、カードやレジエンス達

嫌いなもの：評議会、仲間を傷つけるもの、お化け かわ（殴

外見：美少女。髪型はギルドの女性陣（とくにミラやレビイ、ルーシイ等）に弄られているため、その時々で違う。髪色はアシシユフロン灰金で瞳の色は青。ギルドマークは薄青で右手の甲。明るい色目の服装を好んでいる。小柄で華奢な体つきをしている。

魔法



クロウカード：母親から譲り受け、クロウ・リードが創造した特別なカードであり、新たな魔法。

一枚一枚が意志と力を持っている為、好き勝手に行動しようとするが、前任だったシオンの母が所有者マスターになってからはそれがない。

『星』の力を宿す杖で発動する。

召喚魔法：シオンが自身で学んだ魔法の一つであり、ロストマジック失われた魔法の一つ。

太古の昔この世界で生きていた伝説の生物・レジエンスの魂が宿りし特殊な水晶・ソウルドールから呼び出す魔法。

レジエンスに選ばれた者は、レジエンスの力を最大限に引き出せることができるため、力の制御者サーガと呼ばれる。

ソウルドールは八十一個あるとされていて、シオンが持つソウルドールは十個。

タリスポッドと呼ばれる魔道具を使うが、時によってはなしで使用することもある。

が、全快時の8割程度の力しか出せない。

リボン解放：レジエンスを解放する時に発する言葉。

カムバック封印：レジエンスをソウルドールに戻す際に発せられる言葉。

聖天の書：シオンがいつも持ち歩いている魔導書で、様々な強力な魔法が書かれている。シオンにしか扱えない。

備考：おっとりしているがしっかり者で、賢い。大切な人が傷つけられた時は普段の彼女には思えない程怒る。

強大な魔力を持つ妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導師で、原作開始時はエルザと同じくS級魔導師となっている。

ナツやグレイなどの多くの異性に好意を寄せられているが、それに気付かない鈍感ちゃん。現在はケルベロス達と暮らしている。辛い過去がある。

魔法の方程式を見る『蒼天の瞳』、触れた「モノ」の過去・未来が見える『時空の叫び』、情報を読み取る『解読』という能力を持つ。実は他にも秘密が…？

\*\*\*

まあこんな感じかな？

使うARMアームについては登場してから紹介します。

それでは続きまして…本作のもう一人の主人公、シンのプロフィールです。

シン「俺か…。まあ見てくれ…」

\*\*\*

名前：シン・ヴルムゲン

一人称：俺

年齢：原作開始は26歳

身長：201cm

体重：71kg

好きなもの：戦い、血

嫌いなもの：誇りを汚すもの、仲間を傷つけたもの

外見：髪型はNEEDLESのアダム・ブレイドに似ていて、髪色は灰銀。瞳は紅とエメラルドグリーンの虹彩異色<sup>オレトマニ</sup>。体格は細見だが、引き締まった体つきをしている。ギルドマークは若竹色で首の左側。常に長袖長ズボン。

## 魔法

時のアーク：ロストマジック失われた魔法の一つ。時を操る魔法。

空間魔法：ロストマジック失われた魔法の一つ。空間を自在に操ることができる。

グラビティコア：重力を操る魔法。

ジャッジメント  
断罪者：魔導銃。

紅桜：魔法剣。使い手の魔力を吸収し、切れ味を上げる。

また、本人の意思で形状を自由に変えられることができる。

備考：原作開始時は妖精の尻尾のS級魔導師<sup>フェアリーテイル</sup>。

シオンと同じく、ある過去がある。

シオンに打ち明けようとしている事があるが、中々打ち明けずにいる。  
る。

他にも不思議な能力<sup>チカラ</sup>がある。

\*\*\*

シン「まあこんなところだな…」

キヤ　　！！

シンさんステキ　　！！

ケルベロス「って、自分で作ったキャラやる!？」

だからこそだよ!!

自分で作ったキャラクターを作者が好きにならんでどうする!!

シン「確か俺は…『勇者王ガオガイガー』の『ソルダート』をモデルに作ったらしいが…」

シオン「あ、モデルさんいるんだ…。って、ひょっとして…その人…作者さんの好きなキャラなんですか?」

That's right!

いやあ…マジでJさんカッコいいんだよ

ケルベロス「あーはいはい。そんなことはともかく、つぎはわいのプロフィールや」

何勝手に進めとんじゃゴラァ!!

\*\*\*

名前:ケルベロス

一人称：わい

好きなもの：食べ物

嫌いなもの：評議会、食べ物抜き

外見：仮の姿は黄色っぽいオレンジ色の体に羽が生えたヌイグルミ。真の姿は黄金の瞳を持ち、翼を持つライオン。ギルドマークは赤っぽいオレンジで、背中。

備考：若干ナルシスト。食べ物になると人が変わる。釣られやすい。

クロウカードを守護する封印の獣で、大阪弁で話す。

愛称はケロちゃん。

シオンとは生まれた時から一緒に、とても大切に思っている。シオンとシンの呪いについて知っている。

\*\*\*

ケルベロス「まあまあの出来やな…」

ケルベロス「サン？ケンカ売ってんですか？

まあいい…次はフリーだよ

フリー「ボクの番だね」

\*\*\*

名前：フリー

一人称：ボク

好きなもの：友達や家族、フェアリーテイル シオン

嫌いなもの：大切なものを傷つけるもの、悲しませるもの

備考：人懐っこく誰とでも打ち解ける、子供っぽい性格。友達思いで、優しい為、友達が傷つけられたり、バカにされたりするとものすごく怖い。

ソウルドールの色は灰色。

仮の姿は人型と獣型の二つあり、人型は赤髪に紫の帽子とベストがトレードマークの同い年くらいの少年、獣型は紫の帽子を被った赤い鬘タテガミを持つ幼竜。真の姿は赤髪に黒紫のベストを着て、紫の帽子をかぶった竜。ソウルドール ギルドマークは黒で帽子についている。無のレジエンスで、種族はヘキサドラゴン。

同じレジエンスの中でズオウと仲が良い。逆に、ランシーンとは仲が悪い（主にシオン関連で）、サーガ腹黒。シオンが7歳の頃に発見され、力の制御者になって貰うきっかけをつくった。

\*\*\*

皆「…（汗）」

さて次はシロン様だね

皆「なんで様!?!」

シロン「俺か…。ま、見てくれよ?」

皆「ツッコミなし!?!」

\*\*\*

名前：シロン

一人称：俺

好きなもの：心地よい風が吹く場所

嫌いなもの：気持ち悪い風が吹く場所、暑い場所

備考：乱暴でちよつと凶暴だが、優しい。

ソウルドールの色は白。

人型は金髪に空のような青い瞳で飛行帽が特徴の美青年。白か青色の服をよく着る。

獣型は「ガガガ」しか話せない小さなネズミ（しかもメツチャ可愛い）。

真の姿は飛行帽を被り、金髪に青い瞳を持つ雄々しき白い竜。

ギルドマークは空色<sup>スカイブルー</sup>で、左肩。

風のレジエンズで、種族はウインドドラゴン。

ランシーンの半身。

\*\*\*

シロン「ま、こんな感じだな」

かあ〜っ…マジでシロンカッコよすぎっス!!!

グリード「おい、口調がオリキャラのジャンみたいになってるぞ  
仕方ないの!!俺の中でシロンやJさんは好きなキャラで上位にラ  
ンクインしてんだからさあ!!  
その好きなキャラのプロフィールを書く事が出来るなんて…もう私  
は天に昇っちゃうくらい嬉しいのだよ!!

皆「とりあえず落ち着け」

カンペ【しばらくお待ち下さい…】

ふー…なんとか落ち着いたよ…。  
次は……お願いしまーす。

ランシーン「何故私の名前を言わないのですか!？」

プロフィールみりゃわかる。

皆「どれどれ?……あー……確かに」

ランシーン「…何が書かれているか分かりませんが…次は私、ラン  
シーンのプロフィールです」



\*\*\*

名前：ランシーン

一人称：私

好きなもの：心地よい風、シオン

嫌いなもの：気持ち悪い風

備考：丁寧な口調で話す。ちょっと変態？

ソウルドールの色は黒。

人型は金髪を後ろで束ねて眼鏡をかけた男性。常に黒装束。

獣型は「フグガ」しか話せない小さなネズミ（しかもメツチャ可愛い）。

真の姿は金髪を後ろで束ね、黒装束に身を包んだ漆黒の竜。ギルド

マークは青で黒装束の背中の部分に描かれている。

風のレジエンスで、種族はウインドラゴン。

シロンの半身。

シオンを溺愛している為、フリーと仲が悪い。

\*\*\*

ランシーン「何が悪いんですか！？サーガであるシオンを好きで！  
！」

皆「だってホラ…変態って書いてあるし…！」

ランシーン「…作者さん？少しお話ししたい事があるのですが…いい  
ですよね？」

拒否権なしかよっ！

まあそれはともかく、次はグリードーね。

グリードー「オレだな…」

よろしくお願いしまっせダンナ！！

皆「アンタ、ドコの人だよ？」

＊＊

名前：グリードー

一人称：オレ

好きなもの：愉快的なこと

嫌いなもの：フェアリーテイルに害をなすもの

備考：頼りになる兄貴的な性格で、面倒見が良い。

ソウルドールの色は赤。

人型は赤黒い髪と優しげな緋色の瞳に、黒く長いズボンとTシャツ、革ジャンを着た男性。

獣型はなし。

真の姿はジャケットを着た、炎を纏いし赤き竜。ギルドマークは赤で革ジャン（ジャケット）に描かれている。

火のレジェンズで、種族はブレイズドラゴン。

ガリオンの親友。

ウォルフィーとリーオンと“G・W・ニコル”というチームを組ん

でいる。

シロンのライバル。

ランシーンの対応に困っているシオンのよき理解者。

\* \*

どうよ？

グリードー「悪くねえな」

ウォルフィー「いんじゃないか？」

リーオン「だな。どっかの誰かさんよりマシだな」

ランシーン「…リーオンさん、あとでお話しましょうか？」

皆（あ…終わったなリーオン）

シオン「え…えっと…次はガリオンさんのプロフィールです」

ガリオン「私か…」

\* \*

名前：ガリオン

一人称：私

好きなもの：自然、読書

嫌いなもの：不衛生なもの、変態

備考：面倒見が良い。かなり潔癖症。

ソウルドールの色は緑。

人型は長い黒髪に深緑の瞳を持ち、傷跡のような赤い刺青が両目にある女性で、エメラルドが付いたブレスレットを両手首に身付けている。動きやすく露出度が少ない服を好む。

獣型はなし。

真の姿は黒い体をしたグリフィン。ギルドマークは緑で左手の甲。土のレジエンズで、種族はグリフィン。

グリードールの親友で、シオンにとってよき相談相手。

\*\*\*

とまあこんな感じですね、ガリオン姐さんは。

ガリオン「作者：ウェアウルフとマンティコアと同じ呼び方をするな…」

はい了解であります。次は…

ズオウ「ズオウだよ」

じゃ、お願いね

\*\*\*

名前：ズオウ

一人称：ズオウ

好きなもの：シオンやフェアリーテイルのみんなの笑顔

嫌いなもの：シオンや仲間を虐めるもの

備考：甘えん坊で人懐っこい。

ソウルドールの色は水色。

人型は褐色の肌にくすんだ青い瞳と白髪の少年で、暖かそうな格好をしている。獣型はなし。

真の姿は白い巨体を持つビッグフット。ギルドマークは水色で右手の甲。

水のレジエンズで、種族はビッグフット。  
フリーの親友。

\*\*\*

ウォルフィー「なんかだんだん短くなってねえか？」

気のせい気のせい 次は狼中年です！

ウォルフィー「あとで作者、ツラ貸せや」

\*\*\*

名前：ウォルフィー

一人称：オレ

好きなもの：仲間、リーオン弄り

嫌いなもの：つまらないこと

備考：クールな性格だが、フェアリーテイルの皆と共にボケたりツッコミを入れたりする面倒見のいい一面もある。  
ソウルドールの色は緑。

人型は少し多い白銀の髪に茶色の瞳を持つ男性。獣型はなし。  
真の姿は短剣を腰に挿した人狼。ギルドマークは銀で左の二の腕。  
土のレジエンズで、種族はウエアウルフ。グリードールとリーオンの親友で、GWニコルのメンバー。

\*\*\*

シオン「わぁ ウォルフィーのプロフィール…良く出来てるよ！」

ウォルフィー「そ、そうか？なんか照れるな／＼」

……………

フリー「…あれおかしいな？いつもならここでリーオンが”おー。うーたんがデレてるうー”とか言うハズなのに…」

ケルベロス「そーいやあそーいやあそーやなあ…作者も居らへんし…」

シロン「そーいやあさつき、ランシンのヤツに連れていかれたぜ？」

フリー「あ、ウワサをすれば」

カンペ【そこにはガタガタ震えている作者とリーオンが…】

皆「……………」

グリード「ランシーン…オマエ何したんだ？」

ランシーン「ちょっとしたお話ですよ…ふ、ふふふ…」

皆「……………」(引)

シオン「……………そ、それじゃあ次…リーオンさんのプロフィールだよ」

皆「グツジョブ、シオン!!」

\*\*\*

名前：リーオン

一人称：おれ

好きなもの：仲間

嫌いなもの：つまらないこと

備考：中々お茶目な性格。  
ソウルドールの色は白。

人型は目つきの怖い赤髪にオレンジの瞳を持つ男性。獣型はなし。  
真の姿はバンドナを頭に巻いた翼を持つライオン。ギルドマークは  
黒で右の二の腕。

風のレジエンスで、種族はマンティコア。  
グリードールとウォルフィーの親友で、GWニコルのメンバー。

\*\*\*

リーオン「あれ！？なんかおれのプロフィールヤッだけ少なくて！？」

皆「気のせい気のせい」

リーオン「いや！絶対気のせいじゃないって！！」

そう？リーオンはこれくらいで十分じゃね？グリードールとウォルフイーもそう思うでしょ？

グリードール&ウォルフィー「ああ」

ほらね

リーオン「ほらね」じゃねーし！」

うおおっ！？怒るなリーオン！

顔が怖い分なおさら怖いからっ！！

リーオン「作者アンタがさせたんだろ！？」

ギャーギャー…

シン「…完全に此方を忘れてる様だなあれは…」

シロン「仕方ねえ…次はARMアームと世界観についての説明だ」



「???1」の前につ！僕らのプロフィールだよっ

ケルベロス「誰や一体!？」

「???2」世界観の説明の前に書いてある…」

皆「増えた!?!しかも無視!?!」

シオン&フリー「ではどうぞ!?!」

皆「そこもツッコめよ!?!」

\*\*\*

「???1

名前：銀しろがね

一人称：僕

好きなもの：甘いお菓子

嫌いなもの：辛いもの

備考：作者のオリレジェで種族名はエンジェル

ソウルドールの色は金色で、属性は光。

真の姿は神官や騎士をイメージする鎧をきた、金髪に青い瞳の美青年。

????2

名前：鉄くろがね

一人称：己おれ

好きなもの：本、静かなところ

嫌いなもの：騒がしいもの

備考：作者のオリレジエで種族名はデミエンジェル。

ソウルドールの色は紫で、属性は闇。

真の姿は騎士や死神をイメージさせる鎧を着た銀髪に緋色の瞳の美青年。

## 各種設定

ARMアーム

天空郷アトラにあると云われている、不思議なアクセサリ！。

魔力を練り込むことで発動する。

使用者との相性がよくないと使えない。

ARMアームには、以下のような種類がある。

尚、これに該当しないARMアームもある。

デイメンションARMアーム：移動に用いられることが多い。

別空間にアイテムをストックしたり、その空間を隔てて別の場所に移動したりする。

ウェポンARM：発動すると、武器になるARM。

ガーディアンARM：発動すると、守護者となる魔人や魔獣を召喚することができるARM。

ネイチャーARM：自然の力を引き出したり、己の身体能力を高めたりするARM。

ゴーストARM：禁断のARMで、フェイクARMの原型。

術者と精神が繋がっているため、威力が高いが、最悪の場合、死に至る。

ダークネスARM：対象者に呪いをかけるARMだが、使用者にも副作用という名の呪いがくる。

解除する方法はARMを破壊するかホーリーARMを使うことのみ。失敗した場合、使用者にその呪いがくる。

ホーリーARM：聖なる力で傷を癒したり、ダークネスARMの呪いを解除することができる。

フェイクARM：魔力ではなく生命力で発動する危険なARM。

## 世界観

原作が開始する九年前（シオンがギルドに入る三年前）、“チエスの兵隊”と呼ばれる集団がレスタバ国（シオンの故郷）に戦争  
第一次ウォーゲームを仕掛ける。

しかし、<sup>セブンウォーリアーズ</sup>“七騎士”によって阻止され、指導者と最強の六人、<sup>わず</sup>僅かな残党を残し他は捕まる。

レスターバ国：シオンの故郷であり、“<sup>コマ</sup>チエスの兵隊”によって多大な被害を受けた国で、ファイオーレ王国とは同盟関係にある。とても平和な国で、主な産業は魔道具の精製など。

ファイオーレ王国、イタリアと隣接している。

バラム同盟：闇ギルドの中心的な存在で、“<sup>グリモアハート</sup>悪魔の心臓”“<sup>タルタ</sup>冥府の門”“<sup>オランオンセイイス</sup>六魔将軍”“<sup>コマ</sup>チエスの兵隊”、そして…名称不明のギルドの五つがあり、この五つが闇の五大勢力と言われている。

\*\*\*

ガリオン「こうして見ると…作者は頑張ったようだな…」

フリー「ねー？考えてみるとスゴいよね」

あ、ひよつとしたらシオンちゃんの使用魔法…増えるかもしれません。

皆「いや。もう十分だろ」

それと…オリキャラのジャンやその母親のジェーンと父親のウォーカー、“三つの牙”の紹介は…各話の後書きにつけ足しましたので、そちらの方をご覧ください…  
では…

皆「また次回!!」

入って早々、決闘！？（前書き）

新章突入です！！

入って早々、決闘！？

シオンside .

「ふう…。やっとついたよ…」

それから六日後…やっとの思いでギルドに着いた。

今は私とフリー、ケロちゃんとナツさ…ナツ君の四人でギルドの前に居ます。

本当は…三日で到着するはずだったんだけど…。

「ねえ、ナツ…なんで汽車に乗らなかったのさ！？そうすればもっと早くつけたんだよ！？」

フリーは汽車に乗れなかったからご機嫌斜めでナツ君を責めてる。

実はナツ君が「汽車じゃなくて、歩きで帰る！」って言い出して…こんなに遅くなったんだけど…なんで汽車はダメなのかな？

「しっ…仕方ねえだろ！？オレ…乗り物だめなんだから…」

「えっ？ナツ…君は乗り物苦手なの？」

「…ああ」

そっか…だから…歩きに「っていうか…想像しただけで…ウップ…」  
したって…ええええええっ！！？

そんなにダメなの！？

「そんなにダメなんか!? 乗り物は!?!」

「ってゆうかナツ! お願いだから、ここで吐かないでよ!?!」

今にも吐きそうなナツさ… ナツにケロちゃんは驚いてツッコみをいれて、フリーは注意する。

…想像しただけでって…何かあったのかな?

「まあ、そんなことはともかくとして… たっだいまあ!?!」

『ドア蹴って開けるな!?!』

さすがに今度のは、私もツッコんじゃったけど…

不安になりながら中を見ると…いろいろな人の視線が突き刺さった。特に、青みがかかった黒髪の…なぜかパンツ一丁の男の子と茶髪の女の子の視線が痛い…。

うわぁ… 恥ずかしい… / / / /。

私がそんなことを思っていると、奥からきれいな緋色の髪をした私より年上の… 鎧(?) みたいな服を着た女の子が私達の方に近づきながらナツ君に注意してきた。

「ナツ! 扉を蹴って開けるなと何度言えば分るんだ!?!」

…常習犯なんですな、ナツ君。

「うつ…エルザ！？帰ってたのかよ！？」

と言って私の後ろに隠れるナツ君…ちょっとかわいいかも…。

「全くお前…ん？君は？」

緋色の髪の子…エルザさんはナツ君を怒鳴ろうとしてけど、私に気付いてそれをやめ、尋ねて来た。

「あ…私はシオン・クラウディオといいます。あの…フェアリーテイルに入りたいんですけど…」

「そうか…。ちょっと待っててくれるか？」

「わかりました」

私が返事するとエルザさんは笑って言って、奥の方に戻っていった。途端、ナツ君が私の前に来て目をキラキラさせながら言った。

「すげえなシオン！あのエルザとあんなふうに話せるなんて！！」

「確かにな…つか、ナツがただ不甲斐ないだけじゃねえか？」

「ああん！？ケンカ売ってんのかグレイ！！！」

黒髪の男の子…グレイさんがケンカを売り、それに答えるナツ君。

っていうか…服を着て下さいグレイさん／＼／＼。

私の心情を察したのか、茶髪の女の子がグレイさんに言った。



「やめなよグレイ。っていうか…服…」

「ん？うおっいつの間にな！？」

最初からでしたか？

「けっ…だっせー…」

「んだとナツ！もういっぺん言ってみやがれー！」

「ああ！？やんなのかこのタレ目！」

「やってやるうじゃねえかこのツリ目！」

と言って殴り合いを始めた。

……いつもこうなのかな？

「また始まつちやったか…。あ、そういえば自己紹介してないね。

私はカナ・アルベローナよ。よろしくね…えっと、シオンだっけ？」

「え？はい…。ところで…あれ、止めなくていいんですか？」

と言って私が指差したのはケンカしているナツ君とグレイさん。

カナさんは苦笑混じりに答えた。

「いつもどおりだから気にしないで。それにそろそろ…エルザが止めるだろうしね…」

すると奥からエルザさんが来て二人を叱った。

「やめないかつ！！ナツ！グレイ！」

けど、二人はそんなエルザさんに突っ掛かった。

「んだよエルザ！うるせえんだよ！！」

「そつだ！なんなら…お前がやるつてのかわよ？」

ナツ君？それはおかしいんじゃないかな？

それに…エルザさんがそんなことするはずは「いいだろう…相手を  
してやる」ある…つてえええええつ！？

まさかのやる気満々！？

「かつ…カナさん！止めなくていいんですかつ！？」

「大丈夫よ。すぐに終わるから」

そうカナさんが言った直後、エルザさんの拳が二人のお腹に突き刺  
さった。

「ね？」

「は、はあ…」

カナさんは笑顔でいったけど、私は苦笑いするしかなかった。  
このギルドに入っているのかなあ？と思っていると、

「エルザが帰ってきたってえ？この前の続きだ！かかってきな！！」

奥にいた、青く大きなリボンで白い髪をポニーテールにして、  
髑髏

の描かれたへソ出しの服を着た女の子が、エルザさんを挑発する言葉をかける。

「ね、姉ちゃん…」「やめなよミラ姉!」

その女の子　ミラさんの後ろにいる…おそらく兄弟の女の子と男の子が止めるように言う。

あの二人の言うとおりだなあ…と知っている。

「ミラか…。そういえば決着がまだだったな…」

…まさかの承諾ですか？エルザさん。

そうこうしているうちに喧嘩バトルは始まってしまった…。

ここで大丈夫かなあ…？

side out .

グレイside .

俺は今、エルザとミラの喧嘩バトルを見ている。

「エルザのやつ…あれで俺らにケンカするなっていつから…頭に来るよな」

俺がぼやくと、カナとナツがうんうんと頷く。

「くっそお…エルザもミラもいつかぜってーブツ倒してやる!」

「へいへい…」と、俺は生返事をする。カナの後ろにいる女の子を見た。

女の子の後ろには、赤い鬘を持つ幼竜(?)と羽根の生えた黄色っぽいオレンジ色の小さなクマ(?)が浮いている。

にしても、綺麗な髪だなあ…灰金の髪ってかなり珍しいよな。ってか、ナツとどういう関係なんだ？

…聞いてみるか。

「なあお前。ナツとどういう関係なんだ？」

「えっ？ナツ君とどういう関係って…／／／／／」

？なんで赤くなってんだ？風邪「グレイ服」かって…うおっ！？

そーゆーことか…！

「あ、ワリイ…ってかなんて名前なんだ？」

「シオンっていうんだ！メチャクチャ強いんだぜ？なーシーオン！」

「ふみやっ！？」

そうやって灰金の髪の女の子 シオンに抱き着くナツを見て、なんかイライラしてきた。

ってか、なんでイライラするんだ？

「ねえナツ？この子誰？」

ミラの弟と妹 エルフマンとリサーナがいつの間にか後ろに来ていて、リサーナがナツに聞いた。

「えつとな…シオン…クラウデュオだっけ？」

「ナツ？クラウ”デュ”オじゃなくてクラウ”デイ”オだからね？間違えないでよ！」

とナツに怒鳴る赤い鬘の幼童…って…

はい？

ひよつとして今コイツ…喋った？

「全くやな…。それよかナツ、アレ止めた方がええんとちゃうか？」

それに相づちをうつつオレンジ色のク…

……あれ？

まさかコイツも喋った？

何で喋れるんですか？

「えつと…シオン？その後ろにいるのは…？」

「え？ああ、紹介しますね。オレンジ色の子が”ケルベロス”こと”ケロちゃん”、幼竜は”フリー”って名前なんですよ」

と、笑顔で言うシオンと、

「よろしゅうなー！」「よろしくー」

同じく笑顔で言うクマ（？）      ケルベロスことケロちゃんと幼竜フリー。

「あ、ああ……」

俺が苦笑しながら答えると、リサーナがシオンに聞く。

「うわぁ〜かわいい〜！ねえ、この子たち抱いてもいい？」

「ふふっ    いいですよ」

「ありがとうー！ー」

そう言ってその二匹を抱きしめるリサーナ……ご機嫌だな。

「あ、そ……それよりシオン。じっちゃんに会ってきた方がいいんじゃないねえか？」……ナツ！俺のセリフ取るんじゃないよー！！」

「へっへー    早いモンがちに決まってるだろ？」

「ナツ、その理屈おかしいから」

と、リサーナに抱き締められているフリーが言う。

全くその通りだと思った時、

「ええいつ、やめんかつ！！エルザ！ミラジエーン！」

じーさんの大声が響いた。

side out .

フリーside .

「ええいつ、やめんかつ！！エルザ！ミラジエーン！」

「〜〜ツ！？」

いきなり大きな声が響いて、耳がキーンってなった。

今の大声出した人、いったい誰！？

すっごく耳が痛いんだけど！！

声が響いてきたのは奥みたいで、そこには二頭身のおじいちゃんがいた。

ひよつとしてこの人がフェアリーテイルの総長マスター…マカロフ・ドレア  
ーさん？

ちっちゃー！！まあボクより大きいけど。

ボクがそんな事を思いながら耳を元に戻そうと奮闘していると、

「わしはフェアリーテイルの総長<sup>マスター</sup>、マカロフ・ドレアーじゃ。お主がギルドに入りたいという子かのう？」

いつのまにかシオンの前にいたおじいちゃんが言った。  
「つていうか早っ!!」

「あっはい!!隣のレスターバ王国から来たシオン・クラウディオです。その…よろしくお願いします」

そう言ってお辞儀をするシオン。

「ふむ。礼儀正しくていい子じゃのお…。こいつらにも見習ってほしいくらいじゃわい…」

…今、最後に言ったのってひょっとして愚痴?  
くっそ…耳が元の状態ならちゃんと聞けたのに…。

「あの…マカロフさん？」

「む?おお…そうじゃったな。もちろん大歓迎じゃよ」

やったあ!!

フェアリーテイルに入れたあ!!

ボクが喜んでいると、シオンがおじいちゃん…あ、じゃなくて総長<sup>マスター</sup>に何か話して、奥に行った。

何の話かな?

気になったけど、リサーナって女の子がさらにきつく抱き締めてきたからそれどころじゃなかったけどね…。



しばらくしてシオンが戻ってきた時には、すでに右手の甲に薄青の紋章を押してあった。

みんなも押ししてもらったのかな？

その事をボクが聞こうとした時、ナツが言った。

「よしっ、押ししてもらったなシオン！！さっそくオレと勝負だ！！」

『はいいいいいいっ！？』

ボクとシオン、ケルベロスの声が重なった。

side out .

入って早々、決闘！？（後書き）

今回はシオンちゃんとナツの初バトル！！

お楽しみに！！

VS・ナツ・ギルド最強四人衆から決闘の申し込みっ!?(前書き)

なにかおかしい箇所がある場合、教えてください。

あと、アドバイスをくれると嬉しいです。

では、フェアリーテイル第8話…お読みください!!

VS・ナツ・ギルド最強四人衆から決闘の申し込みっ!?

シオンside.

なんでこうなったんだろっ…。

私は今の状況に頭を抱えていた。

今はギルドの外で、目の前にはキラキラと目を輝かせるナツ君、周りはギルドの皆さんに囲まれている。

本当、どうしてこうなったのお〜っ!?!?

事の発端は遡ること数分前：マカロフさん、じゃなくてマスターに話をした後（と言ってても実際に話したのはシン）、皆のところに戻ってくるといきなりナツ君が私に向かって言った。

「よしっ、押ししてもらったなシオン!! さっそくオレと勝負だ!!」

『はいはいはいっ!?!?』

ナツ君の一言に私とフリー、ケロちゃんの声が重なる。

ってどうかナツ君？今何とおっしゃいました？

「ナ、ナツ君？勝負って…私となのっ!？」

ナツ君は「は？」と首を傾げると、

「だからそう言っただけじゃん。さっ、外行くぜ？」

と、言っただけで外に連れて行くこととする。

すると、フリーが来てナツ君に言った。

「おいナツう？確かこの間の戦い見てたよねえ？…忘れたの？」

「あのおフリー…いくらオレでもそんなくらい前の事覚えてるっつうの!！」

「じゃ、なんで勝負を挑むんや？」

ケロちゃんが聞くとナツ君はニカッと笑って、

「だからこそ勝負だっ!！」

と言い切った。

これ以上は何言っても聞かないな…と思った直後、

「ふむ…わしも実力をみておきたいし…一回でいいからやってくれ

んかのう？」

<sup>マスター</sup>総長にまで言われた…。

後ろを見るとカナさんやりサーナさん、エルフマンさんは苦笑して「頑張つてね」と言い、グレイさんは「まっ、観念して戦つてやるんだな…」と言つて肩を叩く。

フリーとケロちゃんはと言つと…

「「シオン…グッジョブ…」」

と親指を立てて言った…この裏切り者お…。

それに加え、他の皆さんが「<sup>マスター</sup>総長が実力をみたいってことは、それだけ強いのか」「どれくらいのもんかみてみるか」と、<sup>ギャラリー</sup>観客まで…はあ…。

125

時間は戻つて、現在。

私は大きなため息をついた。

「はあ…仕方ないか…。」

腹を括ると、胸元から鍵を出した。

中央部に五芒星の水晶があり、左右には羽根飾りが付いた鍵…お母さんの形見である星の鍵…。

周りから「何する気だ？」と言う声がするけど、今は集中。

「星の力を秘めし鍵よ…真の姿を我の前に示せ」

静かに唱えると、鍵は淡い光を帯びてふわりと浮き上がる。

「契約の下…シオンが命じる！『封印解除』！！」

声を張り上げた瞬間、自分の足元に光の線で描かれた魔法陣…中央に大きく星を配し、左右に月と太陽が置かれた魔法陣が浮かび上がり、鍵はさらに強く光りを放ち、次の瞬間には杖になった。

私とその杖を掴むと、その様子を見た周りから「鍵が杖になった！

？」と、驚きの声上がる。

それを見届けた総長マスターが言う。

「それではっ両者、準備は良いなっ？」

「はいっ！！」「じっちゃん！いつでもいいぜ！！」

審判であるマカロフさんの問いに元気良く答える私とナツ君。

「それではっ、始めっ！！」

その号令を合図に、勝負は始まった。

side out .

ナツside .

「それではっ、始めっ!!」

じっちゃんの声を合図に、シオンがオレに向かって走り出してきた。

そうはさせねーよ!!と、心の中でそう言つと…オレは大きく息を吸い込んで、

「火竜の咆哮っ!!」

と、叫ぶと同時に口から灼熱の炎を吐き出すっ!!

「ナツ　　ッ!!周りのことを考えろっ!!」

エルザがオレに向かって怒鳴ると同時に、シオンは一枚のカードを胸ポケットから取り出して、放り投げた。

直後、手に持った杖でそのカードに触れて叫んだ。

「『<sup>イレイズ</sup>消』!!」

その瞬間、炎が消えた。

ええっ!?

オレは驚いた。自分が出した炎がいきなり消えたからだ。

オレが口を開けてポカーンとしていると、シオンがクスツと笑った。



「これだけで驚かないでね？次は私の番だよっ！！」

そう言っつてシオンはさらに一枚のカードを取り出し、同じように放り投げる。

「合わさって！！」ソード『剣』！サンダー『雷』！」

その瞬間、杖に稲光？と帯のようなものが纏わりついて…稲妻の形をした剣になった。

シオンはそれを振ると小さな声で言った。

「ナツ君…少し痛いけど我慢してね？」

その直後、シオンが消えた。

「なっ！？消えっ…」

「こっちだよっ！！」

シオンの声が聞こえた瞬間、ラクサスに攻撃されたような感覚が体に走って、そこでオレの意識は途絶えた。

side out .

シオンside .

「そこまでいつ！勝者、シオンっ！」

そこに、<sup>マスター</sup>総長の終了の合図がかかって私は剣を杖に、杖を鍵に戻して一息ついた直後、

『うおお』

っ！！！！！！！！』

「ほえっ！？」

ギルドの皆の声が響き渡って吃驚した。すぐさま、グレイさんが私の近くに来た。

「シオンっ！お前強いじゃねえか！」

「ふえっ？そ、そんなことですよ…／／／／／」

( いや、だからそんなことないってレベルじゃないって… )

あれ？何か今…ケロちゃんとフリーが何か言ったような気が…。

「あつ敬語で話すのやめろよ。あと、これから呼び捨てで呼べよ。な？」

「そつ、そつ…だね…。これからよろしくね？グレイ…さん…／／」

その途端、ズコツとグレイさ…グレイ君がこけた。

それをみてクスツと笑った時に、ヘッドホンをつけた…いかにも自分は戦うのが好きですっ！っていう感じのお兄さんが声をかけてきた。

「おい、そこのお前っ！次は俺とやれっ！」

「ふええっ!？」

あの、少し待ってくれませんか？

今、戦ったばかりなんですけど?!

そう思っていると、白い髪の毛の…さっきエルザさんと喧嘩していたミラジェーンさんがそのお兄さんに言った。

「やめなよ、ラクサス…。それにその子は今戦ったばかりだしな…」

私は今、感動しています。

私はミラさんに感謝の言葉を言おうとした…が、

「それに、この子と次に勝負するのは私だよっ！」

…ミラさんですか？

「ああっ？こいつに先に声をかけたのは俺だ！」

「確かにそうだ。けどさつき、今リサーナの近くにいる幼竜…フリ  
ーだっけ？あいつの話聞いた時から戦おうと思ってたんだ」

…ああ…あの時の話聞いてたんですね…。

「はっ！んなこと知るか。とにかく、俺が先だ！」

「だめだっ！この子とは私が先だっ！」

…誰か何とかして下さい。

私が諦めかけていた時、

「やめないかっ二人とも！新人の前で見つとも無いっ！」

エルザさんの声が響いた。

「「ああっ！？やんのかエルザ！？」」

ああ…お二人の怒りの矛先がエルザさんに…。

すみませんっ！と、心の中で謝罪する…が、

「彼女と最初にやるのは私だっ！」

エルザさん…も？

つていうか、私に拒否権はないのかな？疑問に思い、フリーとケロちゃんの方を見ると…

( (シオン…ファイト…) )

と、<sup>テレパシー</sup>念話で伝えてきた。二人とも…他人事みたいに言わないで…。

私が一人…心の中で二人に文句を言っていると、

「まあ待て三人とも…」

ギルドの中からオレンジ色っぽい茶髪の男の人が出てきた。確かこの人…ギルダーツ・クライヴさん…だよな？

ギルダーツさんは三人の前に来ると言った。

「さっきミラが言った通り、この嬢ちゃんは戦ったばかりだ。さすがに四人連続で戦うのは辛いだろうし…明日にしとけ」

ギルダーツさん…いいひ…と？ふと、ここで今の言葉を思い返してみた。

“さすがに四人連続で”

「……あの〜ギルダーツさん…？四人ってひょっとして…？」

恐る恐る聞いてみると帰ってきた答えはというと…、

「ああ…俺もちよいとお嬢ちゃんとお遊んでみたくなっただけだから…」

貴方もかあ

っ！…！！…！！

ここにはシンと同じ戦闘中毒者しかいないのっ！？

ってどうかこの状況って…！！

フェアリーテイル最強と呼ばれている四人に決闘を申し込まれたって事っ！？

あう〜…。

「マ…マスター総長…」

思わずマスター総長であるマカロフさんを見る。しかし、

「ふむ…仕方あるまい…。減るもんじゃないし…やってやりんさい」

………あっさり裏切られた。

その後…誰と順番にやるかを話し合いで決め、1番目にエルザさん、2番目にミラさん、3番目にラクサスさん…そして最後にギルダーツさんという順番になり、結局戦うことになってしまった…。

なんで……なんで「」になるのぉ~~~~~っ！……っ！？

sideout .

VS・ナツ・ギルド最強四人衆から決闘の申し込みっ!?(後書き)

主人公は苦勞するものだからねえ…。

シオンちゃんフアイト!!

シオン「作者さんが書いたからでしょ

っ!?!」



## 無敵の呪文

Free side .

「あゝ サツパリしたなあゝ」

お風呂に入った後、ボクは人型でくつろいでいた。

他のメンバー…っていうか、ケルベロスは寝てて…それ以外は全員お風呂。

え？今ドコにいるかつて？

あの後、先に来ていた月<sup>ユエ</sup>って人の仮の姿  
して、自分たちの新しい家にいるんだ。

如月<sup>きさらぎ</sup> 雪影<sup>せつえい</sup>さんと合流

家はレトロな古い洋館で、たくさーん部屋があつて…スツゴく広いんだ。

なんでも、空き家だったからユキ（雪影のことだよ）が買ったんだつて…スゴいよね。

ちなみにユキはここでカフェをしてるんだつて。

で…説明はこれくらいにしておいて…、この状況どうしたらイイと思つ？

「はあ………」

シオンがさつきからず っと、タメ息ばっかなんだよねー…。

あ、ちなみにシオンはもうお風呂に入り終わつて…薄い桃色のキنگダムチェックのパジャマを着て、椅子に座つてる。

ってゆうかアレ…見てるコッチがタメ息つきたいぐらいだよ。

「シオン…いい加減タメ息つくのやめなよー。幸せが逃げちゃうよ?」

「…うん…確かにねー…ため息をついたらいけないって事はわかってるよー?でもね、明日の事考えると…ため息しか出てこないんだよね…はあ…」

明日。

明日はエルザとミラジェーン、ラクサスとギルダーツさんと決闘する日。

さすがに、シオンとナツが戦った場所ですと危ないからってことで、それより広い更地でやることになって…明日の朝十時にその場所へ集合することになってる。

まあ…シオンがタメ息をつきたい理由はもう一つあるみたいだね。

「…なんでこのギルドにはバトルマニア戦闘中毒者が多いのかな…?」

そうなんだよね…。

じつはあの後「シオンと戦いたいっ!」って人が他にも数人いたんだよね…。

でもまあ、シオンの猛反対とおじい…マスターの判断でその四人だけになったんだ。

にしてもだ。

「たしかにさー、ケンカバカがたくさんいるけど…タメ息のつきすぎはよくないと思うなあ…」

「シオンちゃん、フリー君の言う通りだよ」

「あ、雪<sup>せつ</sup>さん…」

ボクがシオンに言うと、いつの間にかいたユキが相槌をうつた。

「僕も…もう一人の僕も…シオンちゃんの性格は理解してるよ？でも…今回の戦いはした方がいいんじゃないかな？」

「「えっ!?!」」

ちよっ…ユキ今、なんていったの!?!

なんか明らかにユキさんが言わないようなこと言ったよね!?!シオンも目が点になってるし…。

「ねえユキー、どうしてそう思うの?」

ボクの質問でシオンが我に返り、ユキの言葉を待った。

「うん?それはね…」

「「それは?」」

「忘れちゃった…」

ガクツとボクはこけ、シオンはテーブルに突っ伏した。

「忘れちゃった”じゃないよユキ!”

「あはははは…ごめんごめん」

「雪さん…」でもね…これだけは分かってるんだ?何をですか?」

シオンが聞くとユキは目を一旦閉じて、また目を開けた時に言った。

「あの人が言った“戦い”と、あの時の“闘い”は違うものだって事だけ…シオンちゃんも分かるでしょ?」

ユキの言葉に、シオンは頷いた。

「それに…シオンちゃんには無敵の呪文があるんだから…」

「そうですね…ありがとう雪さん…。それから…おやすみなさい…」

「うん。おやすみ、シオンちゃん」

シオンは席を立つと、部屋に戻った。

まあ、さっきよりよくなったかな…？

そんなことを思いながら、ユキの入れてくれたココアを飲んだ。

side out .

無敵の呪文（後書き）

次回はいよいよバトルッ！！

戦闘描写は苦手ですが、頑張りマス！！

フリー「語尾カタカナだよ？」

翌日…（前書き）

かなり、飛ばしているかもしれませんが…どうぞ

翌日…

シオンside .

「あれ？」

次の日…私は今、約束の場所にいるのですが…

どうやら時間を間違えて、20分早く来てしまったみたいですが…  
あはっ

……って『あはっ』じゃないし…（泣）

「どうしようかなあ…」

約束の時間まで20分ある。  
その間…どうやって時間を潰そうかな…。

魔法の練習……はダメだね。

今から（やりたくないけど）決闘しなきゃいけないから魔力と体力は温存しとかなきゃいけないし…。

買い物…って私まだ来たばかりかでお店知らないし…何より、約束の時間を過ぎちゃっし…。

じゃあ読…って持ってきてない…（泣）

「………としたら、やっぱりあれだよな」



そう言っただけのため息をついた瞬間、

「何が”あれ”なんだ？」

「うひゃっ!？」

背後から声がしたから驚いて変な声が出ちゃった…。  
と…いつかこの声は…。

恐る恐る背後を振り向くと、今日戦う相手の一人であるギルダーツさんがいた。

「…いつか…いつのまに…?」

「確かシオン…だったか?早いな」

「い…いえ、そんなことないですよ!ギルダーツさんの方が早いと思いますけど…」

「はははははっ、確かにな…。現に1時間も前からいるしなあ…」

と、頭を掻いて爆弾発言をした。

「…ってええっ、1時間…!?!私より早い…」

「そ…そんな早い時間から…?」

「んー…まあな。楽しみだったっていうのもあるが…昨日あの後、ナツの相手をしてたっていうのもあるけどな…」

「ナツ君の相手…ですか?」

自分でも、声の調子が変わったのが分かった。

昨日…いくら（お願いされた）勝負とはいえ…結構強めに攻撃したから…心配だった。

「？ああ…そうだが…」

ギルダーツさんはそこで一旦区切ると、昨日の事を話し始めた。

「なあシオン…昨日俺に相手してくれって頼んできた時…あいつなんて言って頼んだと思う？」

「えっ？普通に『相手してくれ！』って言ったんじゃないんですか？」

ギルダーツさんは「まあ半分正解だな」というと、傍にあった木陰に座り続ける。

「ナツはな…確かにそう言ったが…その後にこう言ったんだ

『次にシオンと勝負する時に絶対勝ちたいんだ！』ってな

なんですかそれ…？

ナツ君が昨日そう言ってた…？

「……………ぶっ」

思わず吹き出してしまった。  
ナツ君がそう言ったのを…思い浮かべたら、自然と吹き出してしま  
う。

その様子を見て、ギルダーツさんはフツと笑った。

「ところでお前さん…さっき言ってた”あれ”って一体何なんだ？」

「えっ？…ああ！『星欠片アツメ』の事ですか？」

「星欠片集め…？歌か何かの名前か？」

「はいつ！まだ皆さんが来るまで時間があるみたいなので…歌って  
もいいですか？」

「構わねえよ」

やった

そう思うと私は、大きく息を吸い込み…歌い始めた…。

side out .

翌日…（後書き）

今回出てきた『星欠片アツメ』は私の短編小説の一つです。  
ここ変えた方がいいんじゃない？という方はアドバイスクださい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7684y/>

---

FAIRYTAIL ~ Original Story ~

2011年12月26日23時49分発行